

今回は「ユタをめぐる知の動向」と題して、沖縄のシャーマンであるユタに対する評価の問題を扱った。「迷信」とされ、たびたび弾圧の対象となっていたユタには、常に否定的なイメージが付きまとっていた。また、かつては学術的にも扱うに値しないものとして分類されていた。しかし、近年では、本土を中心に「野のカウンセラー」「沖縄の豊かな精神世界の産物」といった肯定的な評価とともに、その知名度は格段に向上している。こうした事態がなぜ起こったのか、今回の発表ではユタをめぐる学知の営みに、ユタに対する肯定的なイメージの誕生の原因を探った。さらに、そうしたイメージが、学知の世界のみにとどまらず、沖縄の人々のユタに対する評価にも影響を与えるものであるとの仮説を提出した。

まず、本発表の枠組みとして、ユタを共有する共同体に住む人々が持つユタに関する知識のレベルと、それを抽象化することで形成される学術的知識のレベルを、それぞれ「民俗知識」と「学知」として大まかに分別することを図式にして提示した。その上で、以下の三つの点からユタをめぐる知の動向を考察した。

- (1) ユタ研究興隆の原因とその特色（学知のレベル）
- (2) トートーメー（位牌）問題に見る沖縄内部でのユタの評価（民俗知識のレベル）
- (3) 沖縄における近年のユタ評価（両者の相互関係）

(1) においては、①学知におけるパラダイムシフトと②日本におけるシャーマニズム研究の受容という2つの観点から、1970年代に盛んになったユタ研究が、ユタに対する肯定的な評価を前提として展開されてきたことを指摘した。その肯定的評価とは、「民衆宗教の担い手」「日本古来の信仰形態の継承者」「共同体における癒しを担う者」等の言葉に代表されるようなものである。しかし、(2)に見られるように、そうした学知のレベルでの評価は、地元感覚とはかけ離れていた。トートーメー問題とは、1980年に位牌（トートーメー）の継承権をめぐる『琉球新報』の誌面上で繰り広げられた論争である。沖縄では慣習的に長男による継承が続けられていたが、それが男女平等等の観点から批判にさらされた。そして、長男継承という悪習を押し付けている犯人としてユタが名指しされたのである。トートーメーをめぐる論争は、いつしかユタをめぐるものとなり、ユタを弾劾する意見が多く取り上げられた。80年代の沖縄においては、ユタは悪習であるとする反ユタ派と、沖縄固有の信仰であるとするユタ肯定派の2つの意見がみられたが、前者の方が圧倒的に優位であった。

しかし、沖縄内部において、近年ユタ肯定派の動きが活発になってきている。シンポジウムや新聞紙面、出版物等を通じて、ユタ＝「癒し」であると再評価していこうという動きがみられる。(3)においては、現地の知識人のユタに対する評価が、ユタ研究における

ユタ評価と共鳴しており、そうした評価がシンポジウム等で沖縄に住む一般の人々へも広がりつつあるということを指摘した。これまで閉鎖的であった学知におけるユタ評価が、民俗知識のレベルへも影響を与え始めているといえよう。最後に、人々のユタに対する評価の変容がユタの儀礼やハンジの内容等を変容させるために、今後のユタ研究においては、ユタをめぐる知の動向に敏感に対処する必要があることを指摘した。

質疑応答

指定討論では、沖縄内部でのユタ肯定派が主催するシンポジウムの詳細についてのご質問と、さらに、本発表のような大きな枠組みからは一般への具体的な影響が見えてきにくいとのご指摘を頂いた。また、「知」という言葉が何を指しているのか、またさらに「民俗知識」という言葉が具体的に何を意味するのかという質問も頂いた。発表で提示した枠組みは、「民俗知識」と「学知」の差異を示すために用いたものであったが、概念としてもっと詰めて考える必要を感じた。プログラム生の方々からの的確な指摘によって、改善すべき点が明らかとなり、発表者にとって非常に意義のある時間となったことを感謝したい。全体としては、今回の発表がどのような流れの中にあり、どのような意義があるかを明示することができていなかったために、全体的にぼんやりとした印象の発表となってしまったようである。今後ご指摘いただいた点を反省し、改善していきたい。